攻撃及び非攻撃幼児の敵意帰属に及ぼすムード操作の効果

片岡 美菜子¹

EFFECTS OF MOOD MANIPULATION ON HOSTILE ATTRIBUTION IN AGGRESSIVE AND NON-AGGRESSIVE PRESCHOOLER

Minako KATAOKA

The first purpose of this study was to examine the difference of hostile attribution tendency between aggressive and non-aggressive preschoolers. The second purpose was to examine the effects of mood manipulation on hostile attribution in preschoolers. Aggressive and non-aggressive preschoolers were administered tests of attributional tendencies in hypothetical ambiguous conflict situations. After the test, the subjects had their mood manipulated by winning or losing computer games. The main results showed that aggressive preschoolers displayed more hostile attributional biases than non-aggressive preschoolers, and that both aggressive and non-aggressive preschoolers exacerbated hostile attributional biases under negative mood manipulated conditions.

Key words : aggressive preschooler, hostile attribution mood manipulation.

子どもが乳児期を過ぎる頃から、仲間関係は子どもにとって、重要な位置を占めるようになる (Damon, 1983)。仲間関係が子どもの中で大きな意味を持つようになると、仲間との関係をうまく結べずに、そのことによって孤独感やストレスを経験している子どもたちもいる (Cassidy & Asher, 1992; Crick & Ladd, 1993)。仲間から拒否されたり、無視されたりすることは、現在の子どもたちの生活に影響するだけではなく、将来の社会的適応までも予測するという研究結果が (Cowen, Pederson, Babigian, Izzo & Trost, 1973; Parker & Asher, 1987)、仲間関係に問題を持つ子どもを早期に発見し、その行動特徴を抽出することを目的とした研究を増加させた。どうすれば人気のない子どもたちが仲間との関係を改善し、将来のリスクから逃れられるのか、それを知るためには集団内におけるそれぞれの地位の子どもがどのような特性を持っているのかを査定する必要がある。そこで、多くの研究が仲間によるソシオメ

トリック法により査定された子どもの社会的地位と、仲間及び教師による行動アセスメントや仲間との実際の相互作用場面を行動観察することにより抽出された行動特徴との関連を検討している (Coie & Dodge, 1983; Greenwood, Walker, Todd & Hops, 1979; Hymel & Rubin, 1985; Ladd, Price & Hart, 1988; La Greca, 1981; 前田・片岡, 1993; Newcomb, Bukowski & Pattee, 1993; Rubin & Daniels-Beirness, 1983; Shantz, 1986)。これらの研究は拒否児の特徴として、攻撃的、破壊的であり、社会的な会話が少なく、不適切な行動が多いこと等を挙げている。

このような仲間受容の低い子どもたちの不適切な行動は、表面に現れた一端にすぎず、行動がどのように引き起こされたかという内面のメカニズムを解明しなければ、不適切な行動の根源的な原因をつきとめることはできない。そこで最近この領域の研究の焦点は、子どもたちの社会的コンピテンスの基礎となる認知を理解することに向けられてきている。子どもの社会的行動と認知との関係を明らかにするために、社会的問題解決 (social problem solving) という観点が注目されて

¹ 広島大学大学院教育学研究科 (Hiroshima University)

いる。この観点では様々な状況における仲間との相互作用を社会的問題解決と捉え、問題状況において適切な認知、情報処理を行うことによって適切な行動をなしうると考えている。従って、不適切な情報処理を行うことが結果として不適切な行動を引き起こし、さらには仲間受容を低下させる。そこで、不適切な行動を起こす原因となる不適切な情報の処理が、どこでどの様に行われるのかについて調べるために、社会的問題解決場面における情報処理モデルが設定され、モデルの各ステップについて実証的研究が行われている (Dodge, 1980; Dodge & Frame, 1982; Dodge & Newman, 1981; Dodge, Murphy & Buchsbaum, 1984; Dodge & Somberg, 1987; Dodge & Tomlin, 1987; Keane & Parrish, 1992; Quiggle, Garber, Panak & Dodge, 1992)。Dodge が提唱する社会的情報処理モデルは、修正されながら拡張されてきているが、基本的な処理過程として、1) 符号化、2) 解釈、3) 反応探索、4) 反応決定、5) 実行、の5つのステップを仮定している (Dodge, 1986)。まず、初めに社会的手がかりを受容しこれを符号化し、次にその手がかりを解釈する。その解釈をもとに可能な行動反応を探索し、それらの反応レパートリーから適切な反応を決定する。そして最後に実際の行動として産出されるという過程である。この情報処理モデルの解釈ステップに関する実証研究は、拒否児の特徴である攻撃性を高く示す子どもが、仲間による偶発的な否定的行為に対して攻撃的に応答することが多いのは、相手の意図を歪んで解釈することによるという可能性を示してきた (Dodge, 1980; Dodge et al., 1984; Dodge & Somberg, 1987; Keane & Parrish, 1992; Quiggle et al., 1992)。このような研究の多くは、被験者として小学生以上の児童を対象としてきた。しかし、先にも述べてきたように子どもの仲間との関係は小学生になる以前の幼児期から始まっており、そこでは、小学生以上の児童と同じように、幼児1人1人の行動が仲間から何らかの評価を受けている。幼児においても拒否児の特徴として攻撃性の高さが挙げられている (前田・片岡, 1993) ことを考えると、幼児における攻撃性の高さが児童と同じように意図帰属の歪みに起因するのかを確かめることは重要である。よって、本研究は幼児を被験者としたときにも同様に攻撃児と非攻撃児の敵意帰属傾向の差がみられるか否か、さらにその結果両者の採る仲間に対する反応に違いがみられるのかについて検討することを第1の目的とする。

また、Dodge & Somberg (1987) は、攻撃男児が仲間の意図が曖昧な条件で敵意の意図に帰属しやすいこ

とを示すとともに、脅威状況下ではリラックス状況下に比べて敵意帰属傾向が高まることを示した。この研究は、実際の仲間との相互作用が、実験室場面のようになりリラックスした状況ではなく、情緒的覚醒を伴った脅威的な状況であることを考慮して、両状況下の意図帰属の差を検討している。社会的行動や社会的情報処理過程は対人的場面でなされるために、多くの場合葛藤や情緒的覚醒を伴い、常に情緒が安定した状態を確保することは難しい。よって、社会的情報処理過程について考えるとき、情緒の影響を無視することはできない。幼児期は認知よりも情緒によって支配されることが多い時期であり、社会的情報処理においても情緒による制御を受けることが多いと思われる。これらの点からみて、幼児期における社会的情報処理過程に及ぼす情緒の影響を検討することは重要だと思われる。よって、本研究の第2の目的として、幼児の社会的情報処理に及ぼす情緒の影響を検討する。

情緒を介した社会的情報処理過程の偏向を検討している研究は少なく、Dodge & Somberg (1987) の攻撃児が脅威状況下で他児の行為を敵意に誤解する傾向があるというもののみである。しかし、この研究の情緒の操作の仕方には問題点があった。実験操作とはいえ、子どもに対して意図的に脅威的状况を経験させることは倫理的、教育的にみて問題があり、改善されるべき点である。そこで、本研究では Isen, Shaker, Clark & Karp (1978) の行ったコンピューターを使ったゲームの勝敗によってムードを操作する方法を参考に情緒の操作を行い、社会的情報処理に及ぼす情緒の影響を検討することにした。この方法は単純かつ明解であり、ゲームの内容が幼児でも遂行可能なものを使えば、容易にムード操作を行うことができるであろう。また、この方法は他の方法に比べて倫理的、教育的な面での問題も少ないと考えられる。また、Dodge & Somberg (1987) が脅威状況下というネガティブな情緒のみを扱ったのに対し、この方法を使えばポジティブなムード操作も同時に検討することが可能である。先行研究では検討されていないため、ポジティブムード操作の影響については予測し難いが、Forgas & Bower (1987) が被験者の感情状態が社会的認知に影響されることを示唆する研究を行い、快感情は認知情報処理を円滑にすることを示唆している。この結果を参考にすると、ポジティブなムード操作を行うことにより、快感情が喚起され、敵意帰属が低下することが予測される。

さらに、本研究では社会的情報処理過程の解釈ステップにあたる敵意帰属に加えて、反応決定ステップ

にあたる被害を与えた仲間に対する反応を実験者が設定した反応の中から選択させることによって、反応決定における攻撃児と非攻撃児の違いを比較する。

方 法

被験者 東広島市内の公立幼稚園年長児118名（男児58名、女児60名）であった。平均年齢は6歳0か月、年齢範囲は5歳8か月～6歳8か月であった。

調査時期 1993年12月上旬から下旬にかけて行った。

材 料 (1)仲間評定用写真カード：仲間指名をさせるために、縦8cm×横6cmの台紙の上に各幼児の縦5cm×4cmの写真を貼り付け、被験者全員の写真カードを作成し、使用した。

(2)教師・仲間評定項目：Matthews & Angulo (1980)をもとに、山崎・菊野 (1990) が作成した日本語版幼児用 Type A 検査の焦燥一攻撃性尺度から、2項目(1.友達に腹をたてることはまれである一非攻撃性項目、2.けんかばや一攻撃性項目)を抽出した。

(3)意図解釈課題：被験者に対して仲間が被害を与える状況を描いた図版を作成し使用した。解釈させる場面は、予備調査によりプリテスト、ポストテスト合わせて8場面設け、各テストに被害小、被害大をそれぞれ2場面ずつ設定した (TABLE 1)。被害の大小については、実際の相互作用では様々な葛藤場面が考えられ、幼児にとってその被害が非常に重大な場合とそうでない場合が考えられることから、被害の重大さの違いが敵意帰属に影響を与えるかどうかを検討するために要因として加えた。また、仲間に対する敵意帰属度を評定させるための大きさの異なる4つの円を描いたカードと、仲間に対する反応を選択させるための、注意する・何もしない・仕返すのそれぞれの場面を描いた図版を作成し使用した。

(4)ムード操作：勝敗を操作できるようにしたパソコン用ルーレットゲームを作成し使用した。また、ゲームの勝敗を明らかにし、ゲームに勝つことへの動機づけを高め、ムード操作を強化するためにコマを使用した。男児用にはJリーグのバッチ、女児用にはセーラムーンRのマスコット人形を使用した。

手 続 (1)攻撃・非攻撃児の抽出：教師評定は、担任教師にクラス全員の幼児について5段階評定をしてもらい、攻撃性項目に対する評定を標準得点化したものを教師攻撃性得点、非攻撃性項目に対する評定を標準得点化したものを教師非攻撃性得点とした。仲間評定は指名法で行い、項目内容は幼児にわかりやすい言葉に置き換えて使用した。指名には、クラス全員の幼

TABLE 1 意図解釈ストーリーの内容

A	おえかき場面	〇〇ちゃんは絵の具でおえかきをしていました。そこにお友達が来て〇〇ちゃんの絵にお水がこぼれてしまいました。
B	積み木場面	〇〇ちゃんは積み木でお城を作っていました。そこにお友達が来て〇〇ちゃんのお城が壊れてしまいました。
C	給食場面	〇〇ちゃんが給食を食べていました。お友だちが歩いてきたときに机にぶつかって〇〇ちゃんの給食にお茶がこぼれて、給食が食べられなくなりました。
D	階段場面	〇〇ちゃんが階段を降りていました。すると後ろからきたお友だちがぶつかって〇〇ちゃんは転んではがをしてしまいました。
E	砂場場面	〇〇ちゃんは砂場でトンネルを掘って遊んでいました。そこにお友達が来て〇〇ちゃんのトンネルが壊れてしまいました。
F	粘土場面	〇〇ちゃんは粘土でぞうさんを作っていました。そこにお友達が来て〇〇ちゃんのぞうさんが壊れてしまいました。
G	お菓子場面	〇〇ちゃんがお菓子を食べようと思って机に置いておきました。そこにお友達がきて〇〇ちゃんのお菓子を全部食べてしまいました。
H	ブランコ場面	〇〇ちゃんがブランコで遊んでいました。すると後ろにいたお友達が〇〇ちゃんの背中を押して、〇〇ちゃんはブランコから落ちてけがをしてしまいました。

注) A～Dは被害小場面、a～dは被害大場面である。

児の写真カードを提示し、各項目について3名まで指名させた。1番目に指名された幼児に3点、2番目に指名された幼児に2点、3番目に指名された幼児に1点を与え、全員について1人ずつの指名得点を算出した。その後、各クラスの平均値とSDをもとに指名得点を標準得点化し、仲間攻撃性得点と仲間非攻撃性得点を算出した。各幼児について、教師攻撃性得点に仲間攻撃性得点を加算し攻撃性得点、教師非攻撃性得点に仲間非攻撃性得点を加算し非攻撃性得点を算出した。攻撃性得点が.05以上で、攻撃性得点と非攻撃性得点との差が1以上の幼児を攻撃児、非攻撃性得点が.05以上で攻撃性得点と非攻撃性得点との差が1以上の幼児を非攻撃児に分類した結果、攻撃児27名、非攻撃児27名を抽出した。

(2)意図解釈課題：まず、プリテストとして意図解釈ストーリーの内容を描いた図版を提示し、1つのストーリーが終わるごとに「お友達は〇〇ちゃんにどれくらい意地悪しようと思ったかな」(敵意帰属得点)、「こんな

ことされたら〇〇ちゃんはどういうかな」(嫌悪度得点)とたずね、大きさの違う円を描いた用紙を使って4段階評定(1=全然思っていない~4=いっぱい思っていた)させた。さらに「こんなことされたとき〇〇ちゃんはそのお友だちにどうするかな」とたずね、①注意する(主張)②何もしない(回避)③仕返しする(報復)について描いた3つの図版を使って選ばせた。ストーリーの提示順序はカウンターバランスを行った。ポストテストはプリテストとは日を改め、ムード操作の直後に行い、プリテストと同様の手続で行った。なお、嫌悪度は予め設定した意図解釈場面の被害の大小に関して、幼児が実際に設定意図と同じく、被害大の場面についてより重大な被害と考え嫌悪感を持ったかどうかを確認するためにたずねられた。

(3)ムード操作:勝敗を被験者にわからないように操作できるようになっている2人用のパソコンゲームでムード操作を行った。教師評定と仲間評定によって事前に抽出された攻撃児と非攻撃児を組み合わせてゲームを行った。この時、被験者が3回続けて勝つ状況をポジティブムード操作、3回続けて負ける状況をネガティブムード操作と設定した。幼児はまず、ルーレット上の4つの数字のうち1つの数字をそれぞれ選び、自分が選んだ数字にルーレットの止まった幼児が勝者となった。対戦する2人にはあらかじめ3つずつコマを渡し、ルーレットで負けたら相手にコマを1つずつ渡すルールになっている。ゲーム後、使用したコマは回収した。

ポストテストが終了後、被験者が3回続けて勝った時あるいは負けた時どんな気持ちだったかをたずね、ムード操作の効果を確認した。なお、ここでそれぞれのムード操作をしたにもかかわらず、それに対応した感想を述べなかった被験者は、ムード操作が効いていないと判断し各群から除外した。そのため、分析対象となる被験者は攻撃児24名(男児14名、女児10名)、非攻撃児25名(男児10名、女児15名)の計49名であった。なお、ポストテストが終了した後もう1度同じ相手とゲームを行い、今度はそれぞれの勝敗が逆になるように操作して全手続を終了した。

結 果

敵意帰属得点

各群の敵意帰属得点の平均値とSD及び人数をTABLE 2に示した。この敵意帰属得点について、2(被験者特性:攻撃、非攻撃)×2(被害:大、小)×2(解釈課題:プリテスト、ポストテスト)×2(ムード操作:ネガティブ、ポジ

ティブ)の4要因分散分析を行った。その結果、被験者特性と被害の両要因の主効果(被験者特性 $F(1,45)=10.81, p<.005$; 被害 $F(1,45)=23.85, p<.001$)とムード操作と解釈課題の交互作用 ($F(1,45)=5.00, p<.05$)が有意であった。

被験者特性の主効果について、攻撃児の敵意帰属得点が非攻撃児の得点よりも高く、被害の主効果について、被害大の敵意帰属得点が被害小の得点よりも高いことがわかった。これは、攻撃児と非攻撃児とは仲間の行為の意図を解釈する際に敵意帰属傾向に違いがあることを示しているとともに、被害の大きさによって敵意帰属傾向が変化することを示している。

また、交互作用における単純主効果の検討を行ったところ、ネガティブムード操作におけるポストテストの得点がプリテストの得点よりも有意に高かった ($F(1,45)=4.20, p<.05$)。その他の主効果や交互作用はいずれも有意でなかった。これは、ネガティブムード操作によって敵意帰属傾向が高まることを示すとともに、ムード操作に振り分けられた各群の敵意帰属得点に差がなく、ムード操作群による偏りがなかったことを示している。

嫌悪度得点

各群の嫌悪度得点の平均値とSD及び人数をTABLE 3に示した。嫌悪度得点について2(被験者特性:攻撃、非攻撃)×2(被害:大、小)×2(解釈課題:プリテスト、ポストテスト)×2(ムード操作:ネガティブ、ポジティブ)の4要因分散分析を行った。その結果、被害の主効果 ($F(1,45)=10.30, p<.005$)が有意であり、被害大における嫌悪度得点が被害小における得点よりも高かった。つまり、幼児は被害小に比べて、被害大と設定された解釈場面について嫌悪を感じていることを示した。その他の主効果及び交互作用はいずれも有意でなく、嫌悪度において被験者特性やムード操作による影響はみられなかった。

TABLE 2 各群の敵意帰属得点の平均値及びSD

被験者特性	ムード操作	N	被害小		被害大		合 計	
			平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
プ リ	攻撃 ネガティブ	11	5.09	1.50	6.55	1.37	11.64	2.14
	攻撃 ポジティブ	13	5.85	1.70	6.23	1.31	12.08	2.49
テ ス ト	非攻撃ネガティブ	12	4.25	1.01	4.75	1.30	9.00	1.96
	非攻撃ポジティブ	13	4.62	1.55	5.31	1.54	9.92	2.79
ポ ス ト	攻撃 ネガティブ	11	5.91	2.47	6.64	1.49	12.55	3.37
	攻撃 ポジティブ	13	4.69	1.20	6.38	1.60	11.08	2.53
テ ス ト	非攻撃ネガティブ	12	4.83	1.72	5.67	1.03	10.50	2.40
	非攻撃ポジティブ	13	4.38	1.39	5.23	1.42	9.62	2.47

仲間の行為に対する反応

仲間から被害を受けた時の被験者の反応を主張（やめてと注意する）、回避（何もしない）、報復（怒って仕返しする）の3つから選択させた反応頻度を攻撃児と非攻撃児それぞれについて TABLE 4 に示した。

仲間の行為に対する反応を攻撃児と非攻撃児の反応の仕方に違いがあるかどうかを検討するために、プリテストポストテスト別に、それぞれ対数線型モデルのあてはめによる2（被験者特性：攻撃、非攻撃）×3（反応：主張、回避、報復）の検定を行った。その結果、プリテストでは反応の主効果（ $\eta^2(1)=8.30$, $SE=.837$, $p<.01$ ）が有意であった。これは、主張的反応が他の反応よりも有意に多いことを示している。また、被験者特性と反応の交互作用（ $\eta^2(13)=1.87$, $SE=.134$, $p<.10$; $\eta^2(21)=2.02$, $SE=.128$, $p<.05$ ）にも有意、あるいは有意な傾向がみられた。これは、攻撃児は非攻撃児に比べて報復的反応が有意に多い傾向にあり、主張的反応が有意に少ないことを示している。また、ポストテストでも反応の主効果（ $\eta^2(1)=7.51$, $SE=.104$, $p<.01$ ）が有意であった。これは、主張的反応が他の反応よりも有意に多いことを示している。また、被験者特性と反応の交互作用（ $\eta^2(13)=3.06$, $SE=.148$, $p<.01$; $\eta^2(21)=1.99$, $SE=.104$, $p<.05$; $\eta^2(22)=1.99$,

$SE=.124$, $p<.05$ ）が有意であった。つまり、攻撃児は非攻撃児に比べて報復的反応が有意に多く、主張的反応と回避的反応が有意に少ないことを示した。

考 察

敵意帰属傾向については、被験者特性にかかわらず被害が小さいときに比べ、被害が大きいときに仲間の意図を敵意に解釈する傾向が高くなり、攻撃児は非攻撃児よりも仲間の意図を敵意に解釈する傾向が高いということが示された。この結果は、攻撃児は仲間の意図が曖昧な場面で意図を敵意に解釈しやすいという先行研究の結果（Dodge, 1980; Dodge et al., 1984; Dodge & Somberg, 1987; Keane & Parrish, 1992; Quiggle et al., 1992）と一致している。さらに、被害の大小については、攻撃児、非攻撃児にかかわらず、幼児が被害小の場面に比べて、被害大と設定された解釈場面について嫌悪を感じていることが示された。よって、予備調査により設定された被害の大小が、幼児が嫌悪を感じる度合いに比例しており、実験計画の意図であった、仲間から受けた被害が自分にとってどれくらい深刻なものであるかという設定は妥当なものであったと考えられる。ゆえに、敵意帰属傾向が被害大の場面で高かったことには、仲間から与えられる被害に対する嫌悪度の高さも影響していると考えられる。

小学生以上の子どもたちだけではなく、幼児においても、攻撃児の敵意帰属傾向が非攻撃児に比べて高いという結果は、早期の介入を行う必要性を示唆するものと思われる。意図帰属に対する介入の有効性について示すものとして、Hudley & Graham (1993) の研究がある。彼らは教師評定と仲間指名によって抽出された攻撃児と非攻撃児に対して攻撃行動を減少させるための帰属的介入を行っている。訓練場面において、被験者を2つの実験群と統制群にランダムに振り分け、各群の処遇前後の敵意帰属傾向の変化を検討している。帰属介入群の処遇目的は、攻撃児が仲間の意図が曖昧であるネガティブな社会的場面において仲間の意図を敵意に帰属させないような訓練を行うことである。訓練後、課題中の相手に対する言動や感情、意図帰属を測定し課題成績とした結果、帰属介入群の攻撃児は処遇後には非攻撃児に匹敵する判断を行っていた。また、教師評定においても、攻撃性が低くなったと評価されていた。このような結果は、帰属的介入が攻撃性を低減させる1つの方法として有効であることを示している。幼児においてこの帰属介入が可能であるかについても、今後の検討課題であろう。

TABLE 3 各群の嫌悪度得点の平均値及びSD

被験者特性	ムード操作	N	被害小		被害大		合 計	
			平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
プリ	攻撃 ネガティブ	11	5.73	1.66	5.91	1.93	11.64	3.20
	攻撃 ポジティブ	13	6.15	1.10	6.77	1.12	12.92	1.90
テスト	非攻撃ネガティブ	12	5.17	1.52	5.75	1.36	10.92	2.43
	非攻撃ポジティブ	13	5.15	1.79	5.92	1.54	11.08	3.10
ポスト	攻撃 ネガティブ	11	5.91	2.23	5.64	2.14	11.55	4.08
	攻撃 ポジティブ	13	5.62	1.73	6.46	1.55	12.08	3.07
テスト	非攻撃ネガティブ	12	5.25	1.92	6.08	1.38	11.33	3.06
	非攻撃ポジティブ	13	5.85	2.51	6.23	2.08	12.08	4.41

TABLE 4 仲間の行為に対する反応頻度

ムード操作		攻撃児			非攻撃児		
		主張	回避	報復	主張	回避	報復
プリ	ネガティブ	27	9	8	32	9	7
	ポジティブ	27	10	15	38	9	5
テスト	合 計	54	19	23	70	18	12
ポスト	ネガティブ	25	11	8	31	13	4
	ポジティブ	27	9	16	34	14	4
テスト	合 計	52	20	24	65	27	8

ムード操作の効果については、ネガティブムード操作によって、攻撃児と非攻撃児の両方の敵意帰属傾向が高くなることが示された。しかし、Dodge & Somberg (1987) の研究においては、攻撃児のみが、脅威的状况を与えられた後の課題で、意図の曖昧な場面においては敵意帰属傾向が高まり、偶発的場面では課題成績が下がることが示されている。この結果から、彼らは、攻撃児は非攻撃児よりも脅威の影響を受けやすく、情緒制御能力が乏しく、情報処理過程が影響されやすいと述べている。本研究の場合、攻撃児か非攻撃児にかかわらず、ネガティブムード操作後の課題で敵意帰属傾向が高まることが示された。この結果は、幼児がネガティブムードの影響を受けやすく、情緒制御能力に乏しく、情報処理過程が影響されやすいことを示すと思われる。両研究の結果の相違の起こった理由として、(1) Dodge & Somberg (1987) の被験者が小学3, 4, 5年生であったのに対し、本研究の被験者が情緒と認知過程とが未分化な幼児であったこと、(2) 彼らの研究で被験者に与えられた状況が脅威的なものであったのに対し、本研究で被験者に与えられた状況はゲームの勝敗によるネガティブなムード操作であったため、この2つの操作によって喚起された情緒の覚醒のレベルや、情緒の種類が異なっていた可能性があること、が考えられる。

ポジティブムード操作については、本研究と同様の目的で行われた先行研究がないために、Forgas & Bower (1987) が行った、快感情状態の被験者は仮想人物の印象評価において、好意的評価をするという研究結果を参考に、本研究においても、ポジティブムード操作をした被験者は仲間の意図を敵意と解釈する傾向が下がるであろうと考えた。しかし、統計的に有意な変化はみられなかった。これは、ムード操作による快感情と不快感情が認知的処理に対して必ずしも正負の一元的な影響を及ぼすものではないことを示しているのかもしれない。

仲間の行為に対する反応では、全体としては攻撃児も非攻撃児も主張的手段で仲間に反応すると答えているが、攻撃児と非攻撃児で比べてみると、非攻撃児の方が主張的手段で反応し、攻撃児は報復的に反応すると答えることが多かった。このことは攻撃児が非攻撃児に比べて仲間に対して攻撃的行動で反応することが多いことを示しており、先行研究の結果と一致している (Dodge, 1980; Dodge & Coie, 1987; Dodge & Frame, 1982; Dodge & Somberg, 1987)。しかし、攻撃児も全体としては主張的反応を多く採っており、状況に関係なく、い

つも攻撃的行動を採っているわけではないことを示している。このことは、攻撃児も有効な方略で反応することができること、それゆえに、介入など学習する機会を与えてやることでより効果的な行動を採れるようになる可能性を示す結果であると考えられる。

仲間の行為に対する反応に関しては、ムード操作の効果を検討するための統計的検定は行っていないが、TABLE 4 からわかるように、ムード操作の前後で仲間に対する反応方略の数に変化はみられない。このことは、敵意帰属がネガティブムード操作の前後で変化しているにもかかわらず、反応方略には影響していないことを示している。このことから、社会的情報処理過程における解釈ステップの処理の歪みのみが、反応決定に影響しているのではない可能性を示している。また、ムード操作は直接、反応決定に影響を及ぼしていないとも考えられる。これは、非攻撃児もムード操作によって敵意帰属が高まったにもかかわらず、反応方略に変化がなかったことから説明される。攻撃児の攻撃性の高さは敵意帰属のみでなく、その他の要因との相互作用により起こっているのかもしれない。例えば、Quiggle et al. (1992) は、攻撃的な子どもは攻撃的行動を採りやすく、攻撃を容易に行うと自己報告しており、攻撃行動に対してより好意的な評価を与えることを示している。この点については Perry, Perry & Rasmussen (1986) も、攻撃的な子どもは非攻撃的な子どもに比べて攻撃行動を簡単に採ることができ、攻撃することによって他者からの不快な扱いを軽減でき、明白な報酬を得ることができると考えていることを報告している。攻撃的な子どもの攻撃行動に対するこのような認識がますます攻撃行動を強化、助長し、攻撃の標的となった仲間からは不当な攻撃として受け取られ、否定的な評価を受けていると考えられる。このような攻撃児の攻撃に対する認識は、社会的情報処理を行う際にも、何らかの影響を与えているのかもしれない。本研究で取り上げた情緒の問題もその1つであるが、社会的情報処理の各処理過程とともに、処理を修正、あるいは偏向させるような制御過程についても、今後さらに検討が必要であろう。

引用文献

- Cassidy, J., & Asher, S.R. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, 63, 350—365.
- Coie, J.D., & Dodge, K.A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year

- longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 261—282.
- Cowen, E.L., Pederson, A., Babigian, H., Izzo, L.D., & Trost, M.A. 1973 Longterm follow up of early detected vulnerable children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **41**, 438—446.
- Crick, N.I., & Ladd, G.W. 1993 Children's perceptions of their peer experiences : attributions, loneliness, social anxiety, and social avoidance. *Developmental Psychology*, **29**, 244—254.
- Damon, W. 1983 Social and personality development. Tokyo : W.W. Norton & Company. (有馬道久訳 1990 仲間関係と向社会的行動の発達 山本多喜司編訳 社会性と人格の発達心理学 北大路書房 Pp. 131—189.)
- Dodge, K.A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162—170.
- Dodge, K.A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota symposia on child psychology*, Vol. 18. Hillsdale, NJ : LEA. Pp. 77—125.
- Dodge, K.A., & Coie, J.D. 1987 Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1146—1158.
- Dodge, K.A., & Frame, C.L. 1982 Social cognitive biases and deficits in aggressive boys. *Child Development*, **53**, 620—635.
- Dodge, K.A., Murphy, R.R., & Buchsbaum, K. 1984 The assessment of intention-cue detection skills in children : Implication for developmental psychopathology. *Child Development*, **55**, 163—173.
- Dodge, K.A., & Newman, J.P. 1981 Biased decision-making processing in aggressive boys. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 375—379.
- Dodge, K.A., & Somberg, D.R. 1987 Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, **58**, 213—224.
- Dodge, K.A., & Tomlin, A.M. 1987 Utilization of self-schemas as a mechanism of interpretational bias in aggressive children. *Social Cognition*, **5**, 280—300.
- Forgas, J.P., & Bower, G.H. 1987 Mood effects on person-perception judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 53—60.
- Greenwood, C.R., Walker, H.M., Todd, N.M., & Hops, H. 1979 Selecting a cost-effective screening measure for the assessment of pre-school social withdrawal. *Journal of Applied Behavior Analysis*, **12**, 639—652.
- Hudley, C., & Graham, S. 1993 An attributional intervention to reduce peer-directed aggression among African-American boys. *Child Development*, **64**, 124—138.
- Hymel, S., & Rubin, K.H. 1985 Children with peer relationship and social skill problems : Conceptual, methodological, and developmental issues. In G.J. Whitehurst (Ed.), *Annual of child development*, Vol. 2, Greenwich : JAI Press. Pp. 241—297.
- Isen, A.M., Shalcker, T.E., Clark, M., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory, and behavior : A cognitive loop ? *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 1—12.
- Keane, S.R., & Parrish, A.E. 1992 The role of affective information in the determination of intent. *Developmental Psychology*, **28**, 159—162.
- Ladd, G.W., Price, J.M., & Hart, C.H. 1988 Predicting preschoolers' peer status from their playground behaviors. *Child Development*, **59**, 986—992.
- La Greca, A.M. 1981 Peer acceptance : The correspondence between children's sociometric scores and teachers' ratings of peer interactions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **9**, 167—178.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, **41**, 152—160.
- Matthews, K.A., & Angulo, J. 1980 Measurement of the Type A behavior pattern in children : Assessment of children's competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, **51**, 466—475.

- Newcomb, A.F., Bukowski, W.M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations : A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, **113**, 99—128.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. 1987 Peer relations and later personal adjustment : Are low-accepted children at risk ? *Psychological Bulletin*, **102**, 357—389.
- Perry, D.G., Perry, L.C., & Rasmussen, P. 1986 Cognitive social learning mediators of aggression. *Child Development*, **57**, 700—711.
- Quiggle, N.L., Garber, J., Panak, F., & Dodge, K.A. 1992 Social information processing in aggressive and depressed children. *Child Development*, **63**, 1305—1320.
- Rubin, K.H., & Daniels-Beirness, T. 1983 Concurrent and predictive correlates of sociometric status in kindergarten and grade 1 children. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 337—351.
- Shantz, D.W. 1986 Conflict, aggression, and peer status : An observational study. *Child Development*, **57**, 1322—1332.
- 山崎勝之・菊野春雄 1990 日本語版幼児用 Type A 検査 (MYTH) の作成 心理学研究, **61**, 155—161.

付 記

本論文は、広島大学大学院教育学研究科に提出した修士論文（1994年度）の一部を加筆修正したものです。本論文をまとめるにあたり、ご指導頂きました広島大学教育学部教授 山崎晃先生、同講師 深田昭三先生に深く感謝致します。また、データの収集にあたりご協力頂きました東広島市立八本松中央幼稚園の先生方、園児の皆様に厚く御礼申し上げます。

(1996.9.9 受稿, 11.16 受理)